



中村俊定文庫  
文庫 18  
740







梅澤の初ふく風を古来の友のせむ  
 ものにも実をきくはるもこのむけするの  
 ろりやうむけのたもこの時なる川の能を  
 うむのむかはにさうのむかしの流をらき流子  
 溝のむか流にははるかむかの橋をぬかす  
 こゝろ一途の春秋をたのむ十七面足  
 かりとて澤のたかしの作書佛の













さるのちいふも葉て啼きあひの  
花をえねのほろもけかゆふ  
あつしき桶の匂いよのちか  
まのさゆりにねんくのさく  
らあまの才もさうせん人  
遠くはなれもさくしのさ  
舞も散もたしせんはなまの月  
ふくたのさの絡もあつ時

芦花  
東杏  
丁凡  
信溪  
皮兜  
百亀  
席嘯  
菊氣

都ももたえのりよせのさ  
あつはなれもはの井の中  
西よほあよふさあつあ  
やのさくもさくかたし  
あつきのちかひもあつあ  
ふくまのさくもあつあ  
あつきのさくもあつあ  
あつきのさくもあつあ

全解  
松溪  
菊社  
さき  
三子齋  
あつ  
桂嶽  
桂志



瓶こゝも大井の波をいひ騒ぐや  
 丁几 牛佛  
 り歌會りのふるまひ 凌宵  
 つかも同舎利や程のむらり程  
 岐托  
 白田の白むよがのふはせく  
 浅溪  
 みら一柱よのささる人たるはよ  
 月雙  
 流うーまむー馬の衣さ  
 流  
 鳥鴨の糸よまらぬあぶらの色  
 豊女  
 是をるまに結うぬ 月  
 月流

ちやくーと部も結をえと狂舞  
 杉溪  
 ちのいふさるはゆいもるうた  
 月雙  
 あふ田舎の批判をいひきく  
 義社  
 けくーの衆のいふまをいひ  
 卜二  
 けくさのいふまをいひ  
 百電  
 けくさのいふまをいひ  
 席備  
 けくさのいふまをいひ  
 片狂  
 けくさのいふまをいひ  
 報平



あはれなる海にこそは 秋の風ぞ吹く  
人の十七年を思ふに 秋の風ぞ吹く  
あはれなる海にこそは 秋の風ぞ吹く  
あはれなる海にこそは 秋の風ぞ吹く

みね

あはれなる海にこそは 秋の風ぞ吹く

一十

あはれなる海にこそは 秋の風ぞ吹く

護地

あはれなる海にこそは 秋の風ぞ吹く

秋

あはれなる海にこそは 秋の風ぞ吹く

木文

あはれなる海にこそは 秋の風ぞ吹く

三

あはれなる海にこそは 秋の風ぞ吹く

惠



鶉のふしむふふ 鈴月子  
 智ぬらふしき 松獨のそし  
 乃巾着ころころ 海母をんさ  
 雪の隈をくす 藤無  
 白川の波より 風をぬく  
 美ふらうらうら 小雀あひま  
 粗毛のまはら 鹿のけのこ  
 くらまのまはら 鹿のまはら

三 蕙 又 風 中 如 物 味

卯まふ 籬ま 鳩ま けり ぬき  
 人のつらみ 海をきく 鈴  
 ゆらゆら 舟の神をゆり ぬ  
 かのほららに 花をさす 風  
 ららら 花衣のやうな 鈴ま ぬか  
 空をまらふ 水のま ぬき  
 血ま 珠ま ぬき ぬき ぬき  
 腕のま ぬき ぬき ぬき

夫 又 蕙 物 風 子 味



九月廿四日の御書

三

九月廿四日の御書

無説

九月廿四日の御書

準

九月廿四日の御書

物

九月廿四日の御書

虎

九月廿四日の御書

又

九月廿四日の御書

説

九月廿四日の御書

書

月 詠

月夜の御書

澧水

月夜の御書

玉珂

月夜の御書

美翠

月夜の御書

梧井

月夜の御書

九皇



くあきよもかひしんるるねらるる

應記

追くしめしめあかいらるるねらるる

百鬼

海雲の井新しき月夜なる

席請

あねあまの白雲のまにはく

乙明

ふししあきもせうしけなをねらるる

鈴石

ふく雲のしんせいなをねらるる

亀任

人しんあきもせいのなをねらるる

あ初

あきしんあきもせいのなをねらるる

桂志

あよあきのあきもせいのなをねらるる

上野 南東

あきしんあきもせいのなをねらるる

玉翁 角浪

あきしんあきもせいのなをねらるる

住法 玉馬

あきしんあきもせいのなをねらるる

兼中

あきしんあきもせいのなをねらるる

屋布

あきしんあきもせいのなをねらるる

長壽

本様 秋



あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

秋の勢 鳥

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六

あきののちかきうらみはあきのぬき本様 作法 又六



林の舟や馬の毛の〜に花をさるる  
 免てゐるや〜の鳥も大粒よ  
 く流るる〜道や鳥かぶき  
 栞の毛をかきぬよ玉や杖の〜鳥  
 夕の鳥や川原の〜波を〜  
 又もよよ〜鳥の〜の鳥の秋  
 伊勢 桑如  
 石桂  
 桐鳥  
 山夕  
 書巻  
 筑の

盆  
 びー  
 きぬぬ

松ふくお小桶の〜も盆の節  
 う〜の〜の〜  
 あう〜なもな夜も盆の夜  
 盆の〜の〜  
 松月のなか鳥ほくや唐の〜  
 くら〜の〜の〜山 稼  
 盆の〜の〜  
 共舟の〜の〜  
 純孝  
 古  
 西孤  
 稲里  
 秋全女  
 豊女  
 鳥安  
 家副



神代も如磁びくは波の月 子人

年よりも文りては年 磁のま 馬の

山次の高よくしまる 磁の神 大坂 升六

八朝 厚 百舌鳥

八朝の鳥よめく事か 松のな さか 亀石

八朝如田中の松よ 第一 石鷄

月まのくは遠く じり なるの鳥 雲田

えゆるは汐海さし ちるる 有隣

啼ありそなきはく ぬの 柳 に 朽木

百舌を鳴かす 歌の ちるる 胡準

兼 毛みり

白の目むきを 鏡ふまもな 佐法 席杖

くはのくはの 昔人 ちるる  
世はまはま ちるるのちるる

まの ちるるの ちるる ちるる ちるる 隆実 乙二



薄くふる雪のうららかな秋の光 かみ 五三

らむ秋のちかき雪のうららかな秋の光 五三

秋原のちかき雪のうららかな秋の光 かみ 一三

都のちかき雪のうららかな秋の光 鳥籠

秋のちかき雪のうららかな秋の光 五三

秋の蝶 秋の山

秋のちかき雪のうららかな秋の蝶 は 五三

秋のちかき雪のうららかな秋の蝶 は 五三

秋のちかき雪のうららかな秋の山 は 五三

秋のちかき雪のうららかな秋の水 五三

秋のちかき雪のうららかな秋の山 五三

秋の山

秋のちかき雪のうららかな秋の山 五三

秋のちかき雪のうららかな秋の山 五三



酔ふくお敷のやり 御なりき 志文

秋のりや大きな幸に人むより 信法 丑物

るも子杖多御信久の節 上総 稗考

秋利啼や松の昔を 上野 輪之

星のぶる角ハものる 上野 川二

秋東の種す かき 風石

秋 武彦 白水

人急 秋種 秋扇

三人のむより 三人 至東

白露のさ 三人 如月

秋涼 三人 茶安

清 三人 是亮

秋 三人 鳥部

着 三人 友右

浦の杖 三人 叙東

杖のり 三人 自來



いせ ちか

宿啼おほもむいよは家板のそと いせ 亀浦

峰のそと人まゝの道 いせ 帰山

ふるまのそと いせ 兼雨

鹿すゑふらもつんぬり いせ 兼夜

小舟のそと いせ 兼舟

風舟のそと いせ 大北

小美 瑞雲

小美と糸の田舎 いせ 中雄

根河まゝの井渡 いせ 洗心

松もよ いせ トニ

このり いせ 量了

信 いせ 世流

枯 いせ 糸人馬 いせ 下結 いせ ちか















名見して心機を清後する 江戸 与秋

梅 やらば

よの家も信ら—さら梅子 さいとう 瀬石

梅白—板木の重なりよ さいとう 方斛

梅さくやなふりなる火焚き 風竹

梅うえよ雨のこわく—白むら 棠子

夜白や—人の病なり 梅の意 致半

二瘦る程ふのほひくふ 近江 梅の意 井来

咲枝—む梅は月たる 上総 二月の意 泉玉

大津画よ杉流る 上野 りる梅の意 丹文

かりぬのせほ 大坂 ころの柳の意 指馬

柳らり 長崎 雲よハ家ののちり 長崎 梅の意 菊也

三味線よの—ぬま さいとう ねわの柳の意 桂露

年く—よん さいとう らゆるの柳の意 金馬

ぞ柳の さいとう ぬま— さいとう 入の さいとう 意 久車世



物くを柳をくまきりて  
里野

舞に柳の又へぬる風  
昌風

美しきやもろくに柳の柳  
土佐の  
土佐

常 藤山翁

美しきや啼くやうき龍のりく  
土佐の  
土佐

美しきや枝の木のぬるる  
土佐の  
土佐

うらたすはま里人の舞  
土佐の  
土佐

うらたすはま里人の舞  
土佐の  
土佐

うらたすはま里人の舞  
土佐の  
土佐

うらたすはま里人の舞  
土佐の  
土佐

うらたすはま里人の舞  
土佐の  
土佐

うらたすはま里人の舞  
土佐の  
土佐

美のや 余寒 夕子

美のや  
土佐の  
土佐

桐



雪、かきゆるみさの春の雪 （江戸） 双樹

旅人の依見えよきや余寒の雪 桂

ききしよおののくも余寒の雪 （江戸） 百桂

うちじきてる雪のたけりもふゆすけ （江戸） 玉泉女

さなほきに福りも雪一ゆすけ （江戸） 枕中

かもせよゆすの川たわもり （京） 巻乳

よひの雪 後の雪

苗一見おを良なきしんか （京） 親子中 洪溪

よひの雪のちか （京） 中あな （京） 海

井の中の雪 （京） ちか （京） 苗代田 龜社

山の井のけ （京） ちか （京） 後の雪 苔丈

山多の雪 （京） ちか （京） 後の雪 ちか （京） 水

雪をわける

雪をわける （江戸） 秋



あまもつらういねもいねなる白魚なる 波静

おくもー 柳もさびー 流瀬供に 右雄

妹らちよくもつらういねの航子なる やま鳥

はうりよけきひまよいなるかりり まよの 可明

そまらき 疎よなるいりー 帰経子 魯景心

けしきも麦のこもさつるものなるふ 上野 詠帰

あまのつらういねもいねなる まよの 柳もさびー

か月のかりなるもなるも船の節 小鳳

あまのつらういねのさの流なる 樊圃

あまのつらういねなるもなるもなる 石明

あまのつらういねなるもなるもなる 本壽

あまのつらういねなるもなるもなる 芳洲

あまのつらういねなるもなるもなる 鳥流

あまのつらういねなるもなるもなる 兼舟

あまのつらういねなるもなるもなる 萬葉

あまのつらういねなるもなるもなる 毫水



神の標ものもふんたふんたり  
 ち風のゆるくもふんたふんたり  
 乃物の新印のくも風の  
 甚其弱のありてはうもふんた  
 終るもふんたの田畑のふるも  
 この庭におもふんたはめても  
 ふんたふんたもはははははは

赤白  
 巨水  
 暮秋  
 日暮  
 丑楼  
 柳吉  
 月店

ちんちん  
 おおん

風も青のゆるくもふんたふんたり  
 海もおゆるもふんたふんたり  
 ちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちん

宣頂  
 東寺  
 葵洲  
 東水  
 重水  
 百樹



晴ま〜ちまを〜いん けさるる たのしみ 養育

〜い〜い〜海〜ま〜い〜ま〜い〜ま〜い〜ま〜い

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い 全齋

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い 桂河

牡丹 ちの楓

備前〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い 信法 伯先

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い 甲斐 嵐舟

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の 絶後 岩竹

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の 上野 菱花

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の 子信

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の 以弦

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の 皮枕

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の ちの楓 ちの楓



たかしのさし(み)か(み)に(み)く(み)の(み)は

さ(み)の(み)に(み)か(み)の(み)は

さ(み)の(み)に(み)か(み)の(み)は

さ(み)の(み)に(み)か(み)の(み)は

さ(み)の(み)に(み)か(み)の(み)は

さ(み)の(み)に(み)か(み)の(み)は

さ(み)の(み)に(み)か(み)の(み)は

ぬね ぬね 鱧

ぬねのりて押りふたのりなをらな

ぬねのりて押りふたのりなをらな

ぬねのりて押りふたのりなをらな

ぬねのりて押りふたのりなをらな

ぬねのりて押りふたのりなをらな

ぬねのりて押りふたのりなをらな

鱧

鱧

鱧

鱧

鱧

鱧

鱧

鱧

鱧

鱧

鱧

鱧

鱧



清水 田植

清らかなる水の響きを流すは

清嵐

昔はあちよりよき稲を種まき

長松

まきをせまくわらじを流すわく

舞泉

舞うのむくもはるふはるは

大晴

候しかりて旅人を導く田植の

志願

えらき種まきの一まきあき

草地

風おふ 後

市の丘におよそく死なれ風甚

伯芳

風おふ新場の松はたき

左巻

ふ麻生(麻)の跡はよけりえん

如毛

返る糸返しはを川社

雲帯

こころを  
ちかき



月影もくしくはさうぬ 昔のま 尾張 士朗

横のまゝのまがたさきより 伊勢 横堂

あのかねを年をさく糸 縁あり 信濃 希言

まきくはまゆかゆ子のまきく 尾山 尾山

あゆめぬかきくはまぬき 山丁 山丁

まきくはまゆかゆ子のまきく 三机 三机

まきくはまゆかゆ子のまきく 上野 五湖

まきくはまゆかゆ子のまきく 龜岡 龜岡

あゆめぬかきくはまぬき 上野 冊周

あゆめぬかきくはまぬき 三園 三園

あゆめぬかきくはまぬき 高尾 高尾

あゆめぬかきくはまぬき 大石山 大石山

あゆめぬかきくはまぬき 東籬 東籬

あゆめぬかきくはまぬき 下野 下野

あゆめぬかきくはまぬき 洞草 洞草

あゆめぬかきくはまぬき 右野 洞草



大木の後く志さる友の月	骨奇
ましとくさ家詞のる原賣	山崎
友山のむふしさいふ帆影のま	園圃
浅佛ゆらむ拾くまゑまき	言阿
う世とまなにははかしく友と流毛	五班
かゝるのまゑ外とめう友の秋	谷町
玉のちまはくよおく	三井

ふしと別行

ふしと別行のまゑ	三井
秋のまゑと秋のまゑ	鈴石
藤のまゑと藤のまゑ	叙来
まのまゑとまのまゑ	百桂
梅のまゑと梅のまゑ	鬼石



佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛

佛三鈴束桂毫右佛

佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛  
佛三鈴束桂毫右佛

佛三鈴束桂毫右佛







秋暮身

秋暮の身は

十二

秋をしのぎ

十三

秋の風は

十四

秋の雨は

十五

秋の月

十六

秋の夜

十七

秋の朝

十八

秋の夕

十九

秋の空

二十

秋の雲

二十一

秋の鳥

二十二

秋の虫

二十三

秋の草

二十四







人の心をなほすものおとけ  
くさりのあまのりたしの帆をぬ  
かきかきのきふみちのく  
きかきかきかきかきかき  
かきかきかきかきかき  
かきかきかきかきかき  
かきかきかきかきかき  
かきかきかきかきかき

二 尾 家 徑 人 山 次

梅澤の松ふくむなまの  
川白くくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく

三  
席 唄



麻蓬 三  
念佛の心  
の終り  
西の日の  
秋の  
白の  
海瓶の中

三 佛 陶 佛 三 佛

小舟の  
人  
既  
多  
佐保  
く  
何  
ま

三 佛 陶 佛 三 佛 陶 佛



いよちをきく 袴はゆるしの 湯と先  
敵のまゝなるもの 湯のたがひ  
おとせし ちかき 湯のまゝの  
ほほくちかき 湯の 湯  
ほほくちかき 湯の 湯  
ほほくちかき 湯の 湯  
人のしるし 湯の 湯  
お佛よすんか 湯の 湯

陶 髻 三 佛 陶 佛 髻 三

茶本 湯をいし 湯の 湯  
お佛よすんか 湯の 湯  
おとせし ちかき 湯のまゝの  
ほほくちかき 湯の 湯  
ほほくちかき 湯の 湯  
ほほくちかき 湯の 湯  
おとせし ちかき 湯のまゝの  
ほほくちかき 湯の 湯  
おとせし ちかき 湯のまゝの  
ほほくちかき 湯の 湯

陶 佛 髻 三 髻 陶 佛 髻 三



美ら島にゆくはなはたのりやうら

勢

高き山に雲はたかきくもりの

華

山を隔たすはなはたのりやうら  
の外は雲はたかきくもりの  
ふれすはなはたのりやうら  
に高き山に雲はたかきくもりの  
つらき山に雲はたかきくもりの  
目の外は雲はたかきくもりの  
つらき山に雲はたかきくもりの



對人... 田... 也...  
... 伊... 人... 詞... 言...  
... 一... 一... 本...  
... 籍... 藏... 百...  
... 甲...

... 山... 友... 夫... 不可...  
... 説... 事... 世...  
... 集... 根...  
... 徹... 記... 記...







信濃國水内郡

登原村

川保氏

高澤藤吉五